
ヨウジョ・ジャパン

knight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヨウジョ・ジャパン

【Nコード】

N9795Y

【作者名】

knigh t

【あらすじ】

勇太は幼馴染の彼女を助け、高い橋の上から落下して行った。
その落ちた先は……

第一節 美の探究（前書き）

どうか怒らないで、生暖かい目で見守ってください。
行ける所までは、毎日更新予定です。
宜しくお願い致します。

第一節 美の探究

彼は、その時熱く語っていた。

「ここに公言しよう。私は美少女が大好きだ！
こら、そこ！ 変態言うな！

良く見てみたまえ、あの完成された美しさを！

つぶらな瞳、カモシカのような足。そして、キメ細やかなる美しき
素肌！

どれをとっても完璧ではないか！ あれこそ究極の美だ！」

両手を広げて熱弁している私に、呆れたような視線を向けているの
が若干一名。

「それ、ただ幼いだけじゃない。大体、女性の前でロリを熱く語る
こと自体がおかしいのよ。

この変態！」

「何を言う！ 私は決して変態ではないぞ。万人よりストライクゾ
ーンが広いだけだ！」

そう断言する私に、冷たい視線を送りながら言った。

「へえ……じゃ、オバサンでも良い訳？」

その言葉に、私は大きく溜め息をついた。

「君は何も判っていないな。最近の御姉様方をしつかりと見たまえ、
10歳は軽くサバ読める美しき淑女が何と多い事か！

これこそ日本の美学が発展している証だ！ 十分にストライクでは
ないか」

「あんた、どんだけゾーンが広いのよ……」
完全に呆れ顔で目をそむけている。

「大は小を兼ねると良く言うではないか。

そもそも美を鑑賞していた私に蹴りを入れてきたのはお前ではない
か！」

「そりゃ、デート中に小学生の女の子をガン見してれば誰だって怒るわよ！」

「わからないわよ……」

「ああ、なんと嘆かわしい……これでは、まるでゴルフに行かせてもらえない父の様ではないか」

「そんなの普通じゃない……」

「なんと！ 君にはルネッサンスの心意気は無いのか！ これは美の探究であり文化なのだ！」

「また適当な話で誤魔化す気ね……」

「では、簡単に説明しようではないか。全ては時代なのだ。」

もはや女子高生が偉かった時代は、ルーズソックスと共に過ぎ去ったのだ！

これからは小学女子が史上最強の霊長類となり、全世界を駆け巡る！

「キモイからやめて……」

どうしても、理解してくれないらしい……

怒ったまま振り向きもせず歩いていった彼女だったが、

その時、突然の突風が襲った。

それは、何処の台風かと思うほどに強く身体ごと横に押し流された。気が付けば、目の前に誰も居ない……

ん？

いったい何処に行った？

橋の影にスカートの裾が見えた。

ような気がした……

だが、考えているヒマは無い。

間髪居れずに私は走った。

危なかった……

あわやと言う所で、その腕を掴む事が出来た。

これは……高い……

下を見れば、自動車やトラックがオマケのミニカーより小さく見える。

あまりの恐怖で、彼女は悲鳴さえ出せない状態のようだ。

こりゃ、落ちたら只じゃ済まないぞ……

慌てて周囲を見回しても、助けてくれそうな人影は無い。

参ったな……

だけど何で、ここだけ手すりが無いんだよ……

そう、手すりがあれば落ちるはずなど無い。

だが、何故か私達の居る位置だけ綺麗に掴まる物が無かった。

これって、犯罪行為だろ……

うっ……ちよつと待て……これは……マズイぞ……

私も橋から身を乗り出して片手で支えている状態だ。

そしてその柱は意外に太く、指に力を込める事が出来ない。

徐々に滑っていく……

やばい……このままでは二人とも落ちる……

腕力だけで粘っているが、そろそろ限界だ。

仕方が無い……最後の手段だ……

私は残りの力を振り絞り、振り子のように彼女を振った。

いーち、にーい、さん！

渾身の力で彼女を引き付けると、勢いよく橋の上に跳ね上がった。

「お前だけでも生きろ！」

力尽きた私が落下する瞬間、全てがスローモーションのように遅くなった。

ああ、本当にヤバイ時はこうなるって聞いた事があるな。

そうか、これで終わりなのか……あっけないものだな……

ん？ 私を見ているのか？

今まで、あんな表情で見られた事なんてあったかな？

おや？ もしかして今すげ〜カッコイイ？

せめて最後の瞬間だけでも、彼女にカッコ良い所を見せられただけでも良かった。

先立つ不幸は許されないだろうが、これはこれで良い人生だった。

うん、もはや私に悔いは無い。

笑顔で見送る私に、彼女は叫んだ。

「出来る訳ないじゃないバカー！」

落ち行く私に向かって、彼女も一緒に飛び込んできた。

「うわ！ 意味ね〜……」

第二節 二二二

「もし……大丈夫ですか？」
ん？

助かったのか？

うお、頭痛て……

思わず頭を手で抑えながら、静かに目を開けてみた。

おお……美少女だ……目の前に美少女がいる。それも人気子役並みにカワイイじゃないか。

こんな美の究極に、一般ピープルが巡り会えるはずも無い。だったら、これは夢なのか？ やはり死んでしまったのか？ 確かに、あの高さから落ちたのだ。死んでいて当然である。そうすると、ここはあの世？

ならば、誰も咎める者は居なからう。

もう、形振り構っている場合ではない。

これは千載一遇のチャンスである。

せめて、お友達にならなければ！

偉大なる光源氏よ！ 親愛なるナボコフよ！ 今こそ我に力を与えたまえ！

おもわず、前に身を乗り出して美少女の両手を握り締める。

「そんな美しいお嬢さん、ぜひ私と仲良くなって下さ……」
後頭部に衝撃が走った。

「いいかげんにしなさいよ、この変態！」

どこかで聞いた声だ、妙に懐かしい……

「っってお前、何で居るんだよ！」

「こつちが聞きたいわよ！ 気が付いたらここなのよ！ 説明しなさいよ！」

そう言われても、私に解る訳も無い。

しばし首を左右に振り、ゆっくりと周囲を確認する。

「何も、わからん！」

また後頭部に衝撃が走った。

美少女が声を上げた。

「あ、頭にお怪我をされております。私の家に治療できる物があります。どうぞ付いていらしてください」

確かに、私の後頭部から血が出ていた。

まあ、今の所は他に何の当ても無い。私達は大人しく付いて行った。

その道中、三人で話しながら歩いていた。

美少女の名前は、マエカラ・キョウコ前唐教子と言うそうだ。

おいおい！ 日本人かよ……

だが、その後の言葉に驚いた。

「私は、教師をしています」

「はい？ 教師？」

この美少女は、何を言っているのだろうか？

何か血迷った？

もしかして、おままごと？ それとも妄想癖？

何だか良く判らないが、この場で変に否定しても仕方がない。

私達も、教子に自己紹介をした。

私の名前は、イマノ・ユウタ今野勇太

そして私の後を追いかけて飛び込んだこの女性は、オイカケ・ヨウコ幼馴染の笈掛遥子
二人とも同じ学校に通う、ごく普通の高校生だ。

かなりの腐れ縁と言って、語弊は無いだろう。

まあ何となく付き合っているような雰囲気になってデートしたりしているが、

実はお互いにこれといった相手が居ないだけの話である。

まあ、そんな事情は話しても仕方が無いので、

当たり障り無い程度で紹介を終わらせたのは言うまでも無い。

何やら、街らしき雰囲気の間が見えてきた。

教子に案内されて辿り付いた先は、驚く事に美少女が溢れかえった街だ。

なんだよ……ここ……

辺りを見渡しても、大人が異常に少ない。

それどころか、男子も見当たらない。

私にとっては嬉しい話ではあるが、ここまで美少女だらけだと不気味でもある。

さらに、ここまで大量に居ては

美少女のありがたみさえも激減してしまうのは不思議な現象だ。

ここは、一体どうなってるんだ？

その時、遥子が冷たい視線で言ってきた。

「それで、何で私達はこんな所に居るわけ？」

その視線があまりに痛いのが、現状では何も答えようが無い。

「わからん……全く、わからん……」

それに諦めたような溜め息をつく。

「それじゃ、どうにもならないじゃない」

少しでも冷静になれるように、心を落ち着かせる。

「うむ、解っている。この状況は確かに尋常では無い。だが、今やれる事は少ないのも確か。ここは出来るだけ多くの情報を収集するべきだろう」

「それは、そうね……」

私達は、教子に案内されるままに家の中へ入っていった。

ここは、美少女ばかりの国。

その名も、ヨウジョ国。

そのまんま過ぎて、もはや何も言う事が無い……

ここの人々は、我々のような大人の姿に成長しない種族だ。

私が数人見かけた大人の姿をした人間は、どうも違う種族だそうだと。そして教子は、本当に教師だったようだ。

知らなかったとは言え、失礼な事を考えてしまった……

ちなみに他の国との交流は基本的に少ないそうだが、

ここはその中でも最果てに位置する。

この町を訪れる他の種族は限りなく少ないと教えてくれた。

怪我の治療を済ませた後に、お茶を用意してくれたので

それを頂きながら私達の事情を話した。

始めは話の内容を理解できなかったようでキョトンとしていたが、ここの事情が全くわからない旨を伝えたと色々と教えてくれた。

すぐに問題になりそうと言え、生活に直接関わる身近な事柄だろう。

どんな話が出てくるのだろうか？ と興味津々に聞いていたのだが、話を聞いていくと不思議なくらいに違和感が無い。

何故か知らないが、私達の常識がかなり通用するようだ。

文字がほとんど一緒ならば、貨幣価値もほぼ同じある。

そして何故か、エンの単位だった。

他の国は、ドルとかユーロになっているらしい。

気持ちが悪いくらいの一致である。

まさかと思って現金を見せてもらうと、さすがに同じではなかったが妙に懐かしい。

それは、まるでオモチャである。

どう見ても、子供銀行の紙幣と硬貨なのだ。

全く、ありがたみが無い……

おもわず二人で笑ってしまった。

教子が不思議そうな顔をしているので財布から現金を出して見せると、

「かっこいい！」と感動されてしまった。

まあ、ここでは使えないのだが……

しかし、そうなる文教子が日本人のような名前も頷ける。

ここは、感覚的に日本と考へても間違ひでは無いだろうと言ふ結論にも至った。

こうなると、今の所は目立って苦勞を伴いそうな事柄は無さそうだ。私達は、ひとまず胸を撫で下ろした。

第三節 なに、それ？

今、全世界が懸念している問題があるらしい。

どうやら海を渡った先の大陸には、

ジョシコーサーと言う恐ろしい生き物が居るという。

「女子高生？」 私達は目を見合わせた。

私は教子に聞いてみる。

「その女子高生って、どんな生き物だい？ もしかしてこんな？」

遥子に向けた指は、思い切り平手で弾き落とされた。

おもむろに、教子が暗い表情で話し始める。

「実は、私達も見ただ事が無いのです。

勇敢な者達は何人も大陸に向かいましたが、帰って来た者は誰一人としておりません」

「だが、放って置けば問題は無いんだろ？」

私の言葉に首を振る。

「いえ、そう断定できません。と言うのもジョシコーサーの勢力の中で

最も恐ろしい存在が生まれ出たと言われています。

私達に伝わる予言が正しければ、いずれ世界は闇に包まれるでしょう」

途中の一言に引かかった。

「予言？」

私が問うと、教子は声を低くして語り始めた。

「はい、それは……1999年の夏、サスペンスの帝王が降ってくる……」

船越が降って来てどうするよ……

「そして……逃げよ逃げよオチツイテ逃げよ……と有名な言葉を残しています……」

避難訓練かよ……

「それって、当てになるのか？」

私の問いに、驚いて反論する。

「何をおっしゃいますか！ これは偉大なる予言でございます！」
何だかなあ？ 言う顔をしている私達に、さらに話を続けた。

「古の時代、ノセタラダマスと言う偉大な予言者がおりました」
また、いきなりイカサマ臭いな……

「彼は国王暗殺や大惨事を記した予言書を残しました。
これまでの歴史を見る限り、全て予言通りなのです。

そして最後の章に世界の終末を記した

ハリセンボンと言う予言を残しております」

おいおい……

「他にもホームシックレコードで未来を垣間見たと言う予言者もありまして、

コモリウタと呼ばれる予言書を残しております。

それによればナマハーゲと言う恐ろしい闇の者が、
ワルイゴイネガなる強大な魔法で世界を滅ぼしたと記されていまし
た」

それは、ただの怖い夢だろ……

「我々に伝わる全ての偉大なる予言書が、その復活を示しているの
です」

いや……聞けば聞くほどに信憑性が……

「それだけでは、ありません！」

話半分と言った私に、何だか教子がムキになっている。
まるで子供のようだ……

いや……見るからに子供なのだが……

「他の国にも予言や伝承があり、とても共通しています」
ほう……それは気になるな。

「隣の国では、ハリセンボンと同様のハルマキドンと言う予言も存
在しているのです」

そう来たか……

「近年、新たにペペロンチーノと言う者が世界の終末を予言しました」

まさか、食べ物シリーズじゃないだろうな……

「ウドガー・オイシーという者も未来を見てください」

旬の味ですか……

教子はさらに続きを語ろうとしているので、さすがに私は切り出しました。

「いや良く判った、予言は良く判った。もういいよ」

それに、目をキラキラと輝かせて

「やっと、判っていただけましたか？」と聞いてくるので仕方なく私は頷いた。

はい……聞いた私が、悪うございました……

第四節 どうする？

神妙な顔つきで、教子が私達に聞いてきた。

「あの、お二人はこれからどうするおつもりなのですか？」

それは、全く決まっていない。

いや、この状況で何も決めようが無い……

「どうしたもんだろうね……考えてはいるんだけど……」

私が困った顔で言うと、続けて教子が言った。

「もし、お二人さえ宜しければ冒険者になってみてはいかがですか？」

「冒険者？」

「はい。勇敢な者達の行方も判らない上に、それを調査する事も進んでいません。そこで国は冒険者を雇っているのです。」

なるほど、探偵みたいなものか……

「もし、お二人がその道を選ぶのであれば、私にも協力できる事はあります」

協力ね……

確かに、何の後ろ盾も無からう現状でその提案はありがたい。

しかし、どうしたものか……

私は教子に聞いてみた。

「ちよっと遙子と二人で、これからの事を相談していいかな？」

「はい、では私はお茶を入れ替えてきますね。ごゆっくりどうぞ」

教子は、ティーポットを持って部屋を出て行った。

さて、どうしたもんだろうか？

「なあ？ どう思う？」

遙子は、私の問いの答えた。

「いや、久々に笑ったわ。涙出て来たし」

「いや、そういう問題じゃなくてさ……」

思わず眉を顰めた私を見た遙子は、軽い溜め息をついてから言った。

「あれが本当の話かって事？」

「そうそう」

私が頷くと、遥子はどこか遠くを見つめた。

「あたしには、本当に思えないわね」

一呼吸置いてから、私はそれに答えた。

「だよな……」

おもわず、溜め息が漏れる。

だが1つだけ気になるのは、誰も帰ってきた者が居ないって所だ。これだけは事実として考えて良いだろう。

「まさか、行く気？」

遥子は、ただでさえ大きい目をさらに大きくして私を見ている。

「ああ、他にする事も思いつかないしなあ……」

私が頬杖をついて嘆くように言うと、遥子も同じようにして言った。

「確かにそうね、生活基盤が無いのよね、あたし達」

「そうなんだよ……そこが大問題だ……」

小さく頷きながら答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9795y/>

ヨウジョ・ジャパン

2011年12月1日16時46分発行